

2009年
12月3日
木曜日

東田啓作 教授（資源経済学）

「コモンズを考える」

悲劇といえます。

その他、生態系や大気もコモンズとして捉えられます。古くは、モアイ像で有名なイースター島の社会が減じたことも、コモンズの悲劇の考え方で説明できます。興味がある人は、イースター島の歴史を調べてみてください。

ところで、必ずしも全てのコモンズにおいて悲劇が起こってきたわけではありません。入会地は、全てではありませんが長い間それぞれの村の人々によって守られていました。どのような要因がうまく管理できるか、できないかを決めるのでしょうか。長いお付き合い、つまり長期にわたる固定メンバーのコミュニティの存在が大事なのでしょうか。確かに、入会地においては村の人たちは長期の人間関係を築いていました。しかし、最近では都市部の住民が郊外の環境保全を訴えて管理

を行おうとしているところもあります。

それでは、利益を得る機会（ビジネスチャンス）があるとダメなのでしょいか。薪や鹿を自分たちの燃料や食糧として利用していれば大丈夫なのに、それらを売ることができるようになるとコモンズは守られないのでしょいか。これはありそうですが、必ずしも成り立つわけではありません。

ポイントは、所有権や利用権をきちんと配分できるかどうかです。環境社会学では、「正当性」という表現を用いたりします。最近では、魚についても漁獲割当といって、一定量の魚をとる権利を配分している場合があります。こうすることで、他人より先にとらなければという誘因が抑えられる可能性が高まります。温暖化ガスの排出権取引も同じで、「きれいな大気」を利用する権利を配

分していると考えればよいのです。

最後に重要なことが2つあります。第1に、望ましい利用権の配分方法は、時とともに変わります。例えば、ある地域で水を利用する権利は、最初は農業者に与えられていたかもしれませんが。人口が少なく、農業が主な利用目的の場合にはそれで大丈夫です。でも、人口が増えて水道用の水がより多く必要になってきたら、水道用に水を多く配分していくことが望ましいわけです。第2に、そもそものようなときに共有地や共有資源から得られる利益の分け方に、その地域に住む人々は合意できるのでしょいか。人々が納得できないようなルールや分け方は、実行にはうつせません。これは皆さんで考えてもらいたいと思います。

コモンズとは、日本語では共有地、共有資源といわれ、個人的に占有・所有して利用することができない、あるいは難しい資源です。例えば、日本の農村にはその後背地に「入会地」と呼ばれるコモンズがありました（す）。入会地は村の人たち全員の共有であり、肥料をとったり、薪をとったりすることができました。

占有することができないと、それを利用する人々はどういう行動をとるでしょいか。自分の目の前にある資源を将来の資源のために残しておいても他の人がとってしまうのは何の意味ありません。しかもその場合、その資源から得られる便益をみすみす他の人に与えてしまうこととなります。そこで、他人より早くとろうとする傾向が強まり、資源を長い目で見て守っていかうとする誘因が弱まるのです。これをコモンズの